日本近代文学会　国際研究集会 エントリーシート【パネル用】

＊発表要旨とメンバーの役割分担はあわせて１５００字程度の日本語で作成してください。

＊代表者・発表メンバーそれぞれのお名前に、カタカナで読みがなを付してください。

＊発表代表者の項目には、所属・会員／非会員の別・住所・電話番号・メールアドレスもご記入ください。

＊お預りした個人情報は適切に管理し、発表にかかる連絡以外の目的には使用しません。

2013年5月20日

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| タイトル | 日韓文学の関連様相―近現代の文学史・比較研究を中心に語る（ラウンドテーブル） | | | | | |
| 代表者 | 氏名ﾌﾘｶﾞﾅ | 渡辺　直紀ワタナベ・ナオキ | | | | |
| 所　属 | 武蔵大学人文学部 | | 身　分 | | 会 員 ／ 非会員 |
| 住　所 | 〒176-8534　東京都練馬区豊玉上1-26-1　武蔵大学人文学部 | | | | |
| 電　話 | 090-6946-6618 | メール | | wata2002@hotmail.com | |
| 発表  メンバー  （フリガナ）  と役割等 | （発表者）波田野節子（はたの・せつこ／新潟県立大（日））  　　　　　沈元燮（シム・ウォンソプ／独協大（日））  　　　　　金在湧（キム・ジェヨン／円光大（韓））  　　　　　Kyeong-Hee Choi（チェ・ギョンヒ／University of Chicago（米））  （討論者）John Treat（ジョン・トリート／Yale University（米））  　　　　　崔泰源（チェ・テウォン／東京外大（日））  （司会）　渡辺直紀（わたなべ・なおき／武蔵大（日））　　　　（通訳あり） | | | | | |
| パネル  全体の  要旨 | 近現代文学研究における日本と韓国の関連様相について、日本、韓国、アメリカで研究の一線に立ってきた研究者らがそれぞれの意見を述べるラウンドテーブルセッション。主として韓国・朝鮮の近現代文学の研究者らがこれまで重ねてきた研究のなかで、日本文学や日本語の問題が深く関与するいくつかの主題について、それらがこれまでどのように扱われてきたか、また今後それらをいかに考えるべきかを提示し、韓日文学の比較研究およびその理論化のあるべき方向性をさぐる。  　朝鮮では開国の過程の甲午改革（1894-95）で政府公用文にハングル文体（この場合、漢字・ハングルまじりの文体、いわゆる「国漢文」）が採用され、その論説文体による新聞なども創刊され、それら新聞に連載される小説でも総ハングル文体の創造が試みられた。このようななかで書かれた翻案小説や政治小説の内容および文体は、日本のそれとの比較・対照の対象となる。また1910年の日韓併合前後から日本に留学した朝鮮半島の青年たちのなかから、当時の日本の文学思潮の環境に接するなかで朝鮮新文学の土台を作り上げる李光洙（イ・グァンス）のような作家があらわれる。その後の民族運動の過程で彼は対日協力の道に進むが、その際にも動員されたのが彼のエクリチュールにおける啓蒙の文体であった。一方、1920年代の朝鮮におけるいわゆる「文化政策」によって民間新聞をはじめさまざまなメディアや同人誌が発刊されるが、近代朝鮮の詩壇掲載にとってもこれらの媒体はとても重要であった。これらの詩壇の構成メンバーも当時の日本詩壇との関係を多分に持っていた。  1920年代中盤から世界各地で同時におこったプロレタリア文学運動は、朝鮮の場合、日本のそれにおける各種論争や創作方法に関する議論をどのように受け止めるかという問題として受け止められた。一例として芸術大衆化論争は朝鮮に持ち込まれたとき、内容や形式の問題よりも文盲率の高さがネックとなった。また旧プロ文学の作家らの多くは解放後、北朝鮮に渡るが、当地で政治的に粛清されたり、かたや韓国では北に渡った文学者であるという理由で長きにわたって研究自体がタブーとされたりした。80年代の韓国における民主化の余波でこれら旧プロ文学の作家らに関する研究が公開的に可能になったとき、その指標として参照されたのが、それまでに蓄積された日本のプロ文学研究であった。このようにプロ文学とそれに対する研究は、その当時に関する研究のみならず、メタレベルでの研究史的な反省が要請される。  　植民地朝鮮における文学創作と日本語の問題は、在日朝鮮人文学の第一世代の作家として、金史良（キム・サリャン）や張赫宙（チャン・ヒョクチュ）の作品に対する研究が中心をなし、それらの研究に日本文学の研究者らも多大な貢献を果たしてきた。近年は、よりミクロな視点にたって、日本語を使用することによるアドレスの変化や、あるいは東京／京城の２つの文壇空間を行き来しながら、朝鮮語と日本語を使い分けた作家らの言説形成とその政治性の問題、女流作家らの日本語創作におけるジェンダー克服と帝国への包摂の問題など、多岐にわたって主題が拡大しつつある。  　このように日本と韓国・朝鮮の近代文学研究において、双方の研究者らが協力して解明できる課題や主題は枚挙にいとまがない。これらの問題においてこれまでいくつもの業績を世に問うてきた発表者らが一堂に会し、今後の研究について展望することはきわめて意義深いものになる。また韓国文学研究者らによるこれらのやりとりを通じて、日本近代文学の研究者らとの間に、それらの課題を解くための研究交流がいかにして可能か、その糸口や契機を見出せるような機会にもなるだろう。  （ラウンドテーブル順序）  ・パネル参加者紹介（若干分）  ・共通課題群に対する各発表者らによる応答（70分）  ・発表者らに対する討論者の質疑、およびそれに対する発表者らの応答（20分）  ・フロア参加者らによる質疑（30分）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　――計120分  （こちら側での準備物）  ・通訳者（日韓／韓日通訳）２名  ・ウイスパリング機器（主としてパネリスト間での意思疎通に使用）  ・パワーポイント原稿（内容補足のための写真版などが中心）  （会場で準備してほしいもの）  ・ＰＣ（windows7が最適）とプロジェクター（パワーポイント映写用・音声は不要）  ・マイク３、４本（有線・無線問わず／出席者が多く、通訳者もいるので、通常より多めにご用意下さい。） | | | | | |